

「女中華」の構築

—— 清末写情小説，新女性小説をめぐって ——

李 艶麗

はじめに

20世紀初めの十年間、吳趸人(1867-1910年)の『恨海』を代表とする「写情小説」(恋愛小説)が大きなブームを巻き起こした。「写情小説」という言葉は、1906年広智書局が刊行した吳趸人『恨海』第一回に由来する。中国の恋愛小説は古くから発達しており、いろいろな名称で呼ばれているが、吳がわざわざ「写情」と定義したのは、「忠」「孝」「節」「義」を写情小説の内核と規定したことによる。つまり、吳趸人が定義した「写情」は、社会、国家、人間の諸種の品格の根源にまで拡大される「情」である。

19世紀末、写情小説が正式に登場する以前には、狭邪小説が氾濫していた。狭邪小説は下層の妓女と零落した文人、放蕩息子を主人公とし、妓院の内幕暴露や墮落した文人に対する諷刺、芸者買いへの懲戒など、主として廓を題材とした物語である。それに比べ、「写情」は明らかに素朴で崇高な美しい物語である。特に「写情」には、独特な徳性的な意味も付与されていたため、後の鴛鴦蝴蝶派⁽¹⁾のように細やかな情を描き、また読者を意気消沈させるような内容の恋愛小説とはまるで異なっていた⁽²⁾。

写情小説に描かれる女性は、深い愛情を持ち、大義を重んじて、国家の危急存亡の際には清王朝の国家再建の希望となる。一方でそこに描かれた男性像は、利己軟弱、薄情無徳であり、この時代の中国文人に見られる様々な弊害を露わにしている。魯迅(1881-1936年)が譴責小説を批評するように、これらの作家の言葉づかいは軽率で、穩健ではない。世の中の好みに合わせるように、時には大げさに言いもする⁽³⁾。

写情小説家は、文人像の描写においては、古代小説の書き方を用い、男性の弱点について何ら批判する意図を持たない。これは、写情小説家が伝統文人の一員として超えることのできない限界を表している。近代への転換期に置かれた彼らは、依然として、伝統的士大夫の「修齊治平」(修身・齊家・治國・平天下)⁽⁴⁾の理想を持ち、三千年未曾有の大變局⁽⁵⁾という時勢下、士大夫精神と伝統文人の情趣を以て、新しい情勢に適応しようとする。

ところで、写情小説はいかにして「国家」性を帯びうるのだろうか。言い換えれば、いかにして個人の恋愛を国家に対する情感にまで昇華させうるのだろうか。また、こうした小説に、私たちはいわゆる本当の「恋」を見出せるのだろうか。

こうした写情小説の問題点を考察する上で一つの比較対象となり、示唆に富むものに同時代の「新女性」小説がある。双方とも女性が主として描かれることには違いないが、一方の写情小説で描かれる女性は美しく、度量が大きく、堅強であるのに対して、「新女性」

小説で描かれる女性は文武の知識と能力に長けており、諸々の点で男性より優越する立場にある。彼女たちにとっては、男性はおよそ不必要な存在である。これら二つの小説とも「女中華」の建設という核においては類比的であるが、それぞれの女性像には著しい差異が見られる。

清末写情小説の今日までの研究の大半は、女性像と女性の心理を分析するものであった。しかし、それに比して、国家像を仮託されるような女性がなにゆえに創作されたのかを検討する研究は少なかった。本論は、清末知識人が意図した「国民の母」による新国家建築という観点から、写情小説における女性像を考察したいと思う。その際、特に「新女性」小説との比較を通じて、写情小説が誕生する社会背景も検討したい。その結果、転換期の文人である写情小説家の、非知識人としての限界を指摘したい。

第一節 写情小説の情感論と「国家」

清末写情小説には、伝統的美徳を備えた庶民としての女性像と、勇敢に愛を追求する女性像とが見られる。後者は、古代の名妓伝と似通った印象を与える。一方、写情小説には軟弱で利己的な読書人の男性像も見られる。それは伝統小説に描かれた士人像と同じ、一つの轍わだちから出たようである。

しかし、「写情小説」が研究対象となるのは、文学史上の一つの文学現象としてだけでなく、伝統小説と異なった点があるからである。写情小説に描かれた女性像と男性像は、古代小説との連続性が強いように見える。しかし、吳趸人が故意に「写情」という語を用いたのには、必ずやその内在的な理由があるだろう。

吳趸人は、譴責小説家としてもっともよく知られる。そのため彼は、時弊を指摘し批判する伝統文人として、社会への関心が強いとされてきた。譴責小説は、清末小説の代表とされている。1903年に四大譴責小説が一斉に生まれたのは、偶然ではない。1902年、梁啓超(1873-1929年)は小説界革命を提唱した。以前は文人の趣味にすぎなかった小説によって政治的理想を大衆に伝えることには、救国覚醒の効果が期待されていた。中国文人は従来から士大夫精神を持っていたが、梁の主張は、広い範囲で反応を巻き起こした。これが、譴責小説が生み出された一つの原因である。

吳趸人は梁啓超と直接の付き合いがあり⁶⁾、彼は自らの多くの作品を、梁が創刊した雑誌『新小説』に発表した。また彼が書いた妓女伝『胡宝玉』(別名『三十年来上海北里怪歴史』『上海三十年艶跡』。上海楽群書局、1906年10月)は、梁啓超の小説『李鴻章』(別名『中国四十年来大事記』1901年)と、構造や書き方において異曲同工の妙があると論じられてきた⁷⁾。

ところで、国家の名のもとで儒家の經典に依拠する「写情」は、大衆を呼び醒まし、個人の恋愛によって愛国心を巻き起こすことを意図していたように思えるが、実は、阿英(錢杏邨、1905-77年)の評価にあるように、根本的には痴情に行ってしまった。事実、読者は

写情小説から「国家」「社会」との結びつきを深める契機を得られるわけではなく、主人公の運命を嘆くばかりである。だが、注意しなければならないのは、理想と結果が一致していないにしても、作者の本来の意図（公の意図）は、「救国覚醒」にあった点である。

「劫余灰」（1907年11月-1909年1月『月月小説』に連載。1909年、上海広智書局単行本）において、吳趸人は「情」を声高に述べ、汎情論の傾向をはっきりと示した。

上は碧落から下は黄泉まで、恐らくひとつの大傀儡場^{かいらい}であり、この傀儡を操る全ての糸口が、すなわち情の字なのであろう。大きくは古の聖人が民を自己と同等と看做し、天下に飢餓溺死する者があれば自らの責任とした心があり、小さくは、ひとつひとつの事物の嗜好があって、それら全てが必ず情の字の範囲内にあるのだ。ただ人間にのみ情があるのではなく、物にもまた情がある。例えば犬馬が主人に報いるのは、言うまでもなく情による。甚だしきに至っては、鳥が春に鳴き、虫が秋に無くのもまた、恐らく情感がそうさせるのである。ただ動物だけに情があるのではなく、植物にもまた情がある。正に春の頃、草木が芽吹き、活気あふれ栄えるのは、もちろん喜びの表れであり、秋たけなわに草木が枯れ落ちるのも、当然ながら衰れな様の表れである。このように、生きとし生けるものには情がある。そうになると、私が『中庸』の幾つかの言葉を借りて情の字を解説したのは、全くその通りであった。しかし、情の字には色々と異なる点があり、それがすなわち近年の小説家が言うところの艶情、愛情、哀情、俠情の類などで、その数は多く、私が見たところによると、痴情が最も多かった。
（『劫余灰』巻首）

似たような論点は、符霖^{きんかいせき}『禽海石』（上海・群学社、1906年）の中にもある。

昔、譚瀏陽（譚嗣同、1865-1898）がこのように語っている。天地万物を創造した神力は、「仁」という字である。私はそうは思わない。「仁」という字は範囲が狭いので、乾坤を構築できず、宇宙を維持することができない。^⑧

この一文からは、吳趸人による經典への挑戦を読み取ることができるだろう。

また同書は、「この写情小説は、天下の情を知る人に読んでもらいたい。それを読んだら、国と民を愛するようになり、男女の愛情はそれにより拡大されるだろう」^⑨と堂々たる主張を述べるが、果たして読者はこの作品から愛国や愛民の思想を読み取れるだろうか。男性主人公が痛恨した孟子の教訓^⑩は、悲劇の源ではない。実は、彼自身が言うように、「私の最愛の人は、実は私のために苦しんだ」^⑪のである。

さて、清末小説の先頭を切った政治小説などの「新小説」は、政治性が比較的強かった。文人は当時の政治言説に呼応しながら、変容した「小説」の姿を不満に思い、「小説」を正

しい軌道に乗せようと工夫した。吳趸人もまた女性を称讃するが、女性の宗族や夫に対する「情」を、国家に対する「忠」にまで向上させようとしたことは間違いない。

忠孝節義、情け深さ、勇敢奔放という清末写情小説に描かれた女性像の三大特徴は、古来の小説の女性像とさほど変わらない。強いて言えば、男性像も白面書生の軟弱な性格を一貫して継承してきた。ただし、清末写情小説は以前の恋愛小説を繰り返しているだけのように思えるが、無視できないのは、清末写情小説の前に政治小説、譴責小説のほか、恋愛小説の系譜に連なる狭邪小説⁽¹²⁾があったことである。

狭邪小説に描かれた女性は、下品な娼妓であり、品行が高尚な名妓ではない。また、上海に現れる文人の様々な醜悪さもそこで暴露された。こうしたものは、明らかに清末写情小説に見られる純潔な女性像とは異なっている。写情小説は、狭邪小説の流行などによる当時の混乱を鎮めて、正常に戻すような機能を果たした。さらに重要な点は、写情小説の主人公が「妓」から「良家婦女」に転換したことである。それは文人が、以前の青楼文化（あるいは雅趣というもの）から日常文化（あるいは世俗というもの）へと目を移したことを意味している。すなわち、「人」への関心の発生である。

「妓」によって代表される青楼文化は、世俗を遊離し、文人の心を慰藉する架空のものである。つまり、「佳人」は「才女」と同類型であり、文人の「分身」である。それに対して、「良家婦女」は詩情画意に疎い普通の女性であり、文人が自己を世俗の中に入れ、心を安置する実在の場所となる。

ところが、文人が自分を世俗化して、上流である「文」の階層でなくなると、彼らが自己を寄託する「良家婦女」は、もっぱら国家に必要な「忠」を向上させる役割を担うことになる。そのために、様々な動乱の中で、幾度も苦難を経験する筋立てが設けられている。この点は、従来の恋愛小説には描かれなかったもので、20世紀初頭、知識人が行なった救国啓蒙運動の一つ、「新女性」という重要な主題とも符合している。彼らは、伝統的倫理道徳に合う「賢妻良母」こそが新しい国民を育てるための「母」だと唱えたのである。

第二節 知識人界のフェミニズム

一 救国時勢下の女性観

近代以前、女性の中国社会における地位は、「男尊女卑」、「女性は才が無ければ、徳」、「夫は妻の綱」、「紅顔薄命」、「紅顔禍水」という俗語によってまとめられた。なぜこのような根強い観念が形成されたのか。その理由は端的に二つある。一つ目は、『易経』⁽¹³⁾などの儒家経典の影響。二つ目は、実際の生活において、女性が受けた教育が男性よりずっと少なく、極端な場合は、教育の範囲から除外されたため、女性が政治構造に入れず、公共的意義のある職業に従事できなかったことである。それゆえに、女性の職分としての「家」の仕事が優先されるようになった。

「家」の中で、女性は経済、管理の大権を握っているように見えるが、「夫は妻の綱」という前提を無視してはならない。また、一部の文学の教育を受けた女性は、天（神）に嫉妬されることが多く、いわゆる才女は若死にする。また、朝野の政治、国家の大事に関与する女性は、美貌が政治の妨げとなると言われ、「災禍」（「禍水」と看做される。歴史上、^{だつき}妲己⁽¹⁴⁾、^{せいし}西施⁽¹⁵⁾、^{ぐき}虞姫⁽¹⁶⁾、楊貴妃⁽¹⁷⁾といった女性の名が挙げられるように、女性のために国が亡んだとされる例は多い。

しかし、近代以降、西洋の宣教師が中国に入って宣教するようになると、女性に対する教育の機会が増え、近代西洋の女性観も次第に滲出してきた。アヘン戦争後、西洋の学問が輸入され、また洋務運動が「中学を体に、西学を用として」という標語を掲げ、積極的に西洋の学問を吸収したことが、中国の士大夫に重要な影響を与えた。最初に目を開き、世界を見た有志の士、林則徐（1785-1850年）、王韜^{おうとう}（1828-97年）などが、西洋の近代女性観を取り込んだ。王韜『漫遊隨録』（上海著易堂、1891年）、李圭『環遊地球新録』（続修四庫全書第737冊、影印光緒刻本）、陳虬^{ちんきゆう}『治平通議』（続修四庫全書第952冊、影印光緒十九年甌雅堂刻本）といった論著は、女性が男性と同様の教育を受ける権利を持ち、同様の知恵を持っていることを強調している。また、女性の纏足の非人道主義を強く批判し、女性の心身を害した貞節烈婦の道学観念を非難し、女性解放を追求しようとした。つまり、近代以前の進歩的知識人が提唱したフェミニズムは、教育の平等、纏足の廃除、節婦制度の廃除という三つの点を重視している。しかし、その本質は「従属」の立場で論じるものであり、女性に独立した人格を与えるものではない。この点に関しては、1915年の『新青年』において、ようやく本当の意味でのフェミニズムが検討されるようになった。

知識人が「国民の母」の提唱を行なったお蔭で、女性の地位は大幅に向上し、女性は尊重されるようになったが、そこでの女性は、中華を救い、新国家を建築するのに重要な要素と看做されはしても、「個体」解放がなされるわけではなかった。纏足は野蛮と落伍を意味し、女学の興隆は強国保存と関係していたのである。

ここで、注意しなければならない問題がある。女性の人権に関しては、纏足、女学のほか、「妾」という重要な問題があるのに、『時務報』や『清議報』には「廢妾論」についての文章が一つも掲載されていないのだ⁽¹⁸⁾。このころの日本では、福沢諭吉（1834-1901年）や森有礼^{ありのり}（1847-89年）などの知識人が活発に妻妾論を戦わせていたが、中国の知識人はそれらを何も輸入しなかった。中国の知識人の態度は曖昧だったのだろう。

ところで、清末の中国人は、「物競天択、適者生存」⁽¹⁹⁾という進化論に深い衝撃を受けて、危機を意識するようになったが、どのように対処するか戸惑っていた。それに対して、知識人は様々な解決案を提示した。康有為『礼運注序』（1897年頃著。1913年、『演孔叢書』と改名して上海広智書局より単行本刊行）、章太炎「俱分進化論」（『民報』第七号、1906年9月）、劉師培「亜洲現世論」（『天義派』第七、第八巻合冊、1907年11月）といった論著は、積極的に実社会に出るか、消極的に厭世するか、中国と世界との位置関係について議論している。

すでに中華中心論が敗れたことを理解した中国人は、帝国列強が虎視眈々と植民地拡大を狙う中、救国の緊迫性を強く感じ、知識人界は救国を大いに議論した。そのような渾沌たる時代ゆえ、救国に有効であれば、どのような考え方でも取り入れて運用するようになった。仏教救国論⁽²⁰⁾や道徳救国論⁽²¹⁾、経済・軍事救国論⁽²²⁾といった名論も多く出されている。

新中華を建築するには、まず「新民」を創造する論説が必要となる。嚴復「原強」(天津『直報』1895年3月4日-9日)、梁啓超「新民説」(『新民叢報』第1号-72号連載、1902年2月8日-1906年1月6日)、蔡元培「關於教育方針之意見」(『東方雜誌』1912年第4号)は、その代表として挙げられる。だが、一口に国民の創造と言っても必ずしも同じではなく、それぞれの時期によって内容が異なる。嚴復(1853-1921年)は民智、民力、民徳を提出し、「独立」を第一に立てよと訴えたが、梁啓超は「中国人」の身分を打ち立てようとし、蔡元培(1868-1940年)は世界観教育を唱導する。救世の方法とする「新民」は、中流社会を対象として、中国人全体ではなかった。しかし、その後まもなく、「国民の母」「軍国民」といった観念が、次第に下層社会にまで広がった。これは近代通俗小説の発展を直接促すことになった。

二 「国民の母」

梁啓超が提出した「新民」は、民族国家のための自我の作り直しを意味する。ゆえにそれは、功利的な「国民」と言ってもいいだろう。では、そのような新しい民は、どのようにすれば養成できるのか。梁は、教育、特に家庭教育の重要性を唱える。それゆえ、「国民の母」という問題を持ち出したのである。彼は、新小説の綱領的な論著「論小説と群治之關係」(『新小説』第1号、1902年11月14日)において、「今日、社会⁽²³⁾を改良するには、必ず小説界の革命から始めねばならない。新民を作り上げるには、必ず新小説から始めねばならない」⁽²⁴⁾と言っている。

なぜ新小説は中華を助けられるのだろうか。それは、通俗な小説によって、救国覚醒の政治理念を大衆に伝えられるからだ。「小説」の効果は迅速、広範、有効であり、ほかのいかなる手段よりも勝っている。このような「小説」が広い範囲で受け入れられた一つの重要な原因は、そこに「情」が述べられ、とりわけ恋愛小説が人々の心を引きつけたからである。一方で、梁啓超らの作った政治小説の類は面白みに欠けたため、効果が得られず、けっきょく彼らは写情小説を募集することによって、政治的主張を実行するようになった。そうして、「女性」を「国民の母」にするための重要な舞台を提供した。

実は、先秦時代にも「賢女」「賢母」「賢妃」という言葉があった。漢代の文献の中には「良妻」「賢婦」「良婦」という用語もある⁽²⁵⁾。それは、古代の「天人合一」という文化概念に深く関わっていた。伝統社会では、女性を無視するどころか、女性の家庭内の役割を非常に重視していた。儒家の「修身齐家治国平天下」という言葉は、個人、家族、国家、天下の関係をよく示している。「家」の安定は社会安定の基礎であり、治国の前提と看做さ

れた⁽²⁶⁾。

しかし、「賢妻良母」が一つの言葉として流行し始めたのは、20世紀初めのことである。当時、中国では女子教育ブームが生じており、日本で盛行した良妻賢母主義も中国に入ってきていた。それは中国の伝統規範である女性の才徳兼備主義と一致している。1905年、『女子世界』に蘇英の演説が載り、1906年4月22日『順天時報』に日本の文部大臣牧野伸^{のぶ}顕^{あき} (1861-1941年)の演説が載ったのが、中国で「賢妻良母」が用いられた最初の例という⁽²⁷⁾。つまり、「賢妻良母」の概念は、政治小説と同じように日本から持ち込まれたのである。ただ、日本では、「良妻賢母」という異なる言葉づかいである。明治日本は国民国家を建設するためにこの概念を提出したが、それと同様に、中国の政治家と知識人がこの言葉を借用したのは、それが新中華建設の理念に見事に符合したからである。

「賢妻良母」の代表的な論述としては、たとえば金一 (1874-1947年)が『女子世界』の発刊に寄せた次のような言葉が挙げられる。

中国を新しくするためには、必ず女性を新しくしなければならない。中国を強めるためには、必ず女性を強めなければならない。中国を開化するには、まずわが女性を開化させ、助けなければならない。これは、ぜったいに間違いない。⁽²⁸⁾

彼は、女性の役割を相当高く評価して、「20世紀の中国世界は女性の世界であり、できないことは何もない」、「中国が滅ぼされる運命は、女性によって救われるかもしれない」とまで言っている⁽²⁹⁾。梁啓超が国家の興亡を新小説に託したのも、これと同じ理由である。この例に示されるように、中国近代思想と文化とは、常に女性と国家民族を結びつけて、その地位を向上させようとする。梁啓超は、1898年に「倡設女学堂啓」(『時務報』光緒23年10月21日)を発表して、女性は夫、子、家、種(民族)のために良く役立つべきだと語っている⁽³⁰⁾。

このような知識人の圧倒的な「国民の母」論に対して、五四新文化時期に、胡適 (1891-1962年)は超賢妻良母主義を主張している。彼は「米国的婦人」(『新青年』第5巻第3号、1918年9月)において次のように語っている。

女性も堂々たる一人の人間である。負うべき責任があり、やるべき事情があるが、なぜ人が賢妻良母でなければ、天職を尽くすと言えないのだろうか。⁽³¹⁾

女性が優しくて、賢妻良母であるならば、それは無論よいことだが、その前提として、まず独立する人間でなければならない。しかし、もし国家、民族が存在しないならば、女性としての「独立」はどこから得られるのだろうか、というのである。

三 「美人」は西洋人

女性は独立して自由になるべきである。この点は、誰もが賛成するだろう。しかし、だからといって、女性は賢妻良母になりたくないと言えるだろうか。賢妻良母は別に非難すべきことではないだろう。

ところで面白いのは、梁啓超の主張する「新民」を創造するには、女性という重要な要素が必要だが、一方、当時の中国の女性は纏足しており、これが批判の対象となっていた。そのため梁啓超は、著名な論文「論中国學術思想變遷之大勢」で「西洋の美人を娶る」必要性を次のように論じている。

20世紀はすなわち二大文明の婚姻時代であり、わが同胞は結婚披露宴を行ない、西洋の美人を迎える。彼女はきっとわが家で良い子を育て、わが宗族を振興させることだろう。⁽³²⁾

中国的伝統の良い面を發揮させ、悪い面を除いて、西洋の先進的文化を吸収するという「中西通婚」の構想は、20世紀初頭、多くの人に謳われた。^{えきだい}易簫「中国宜以弱為強説」(『湘報』第20号、1898年)は、黄色人種と白色人種とが結婚して生んだ子供は、きっと身体が丈夫で、文学に秀でているに違いないと言っている。しかも、中国は西洋と通婚することによって、種を保つことができるという⁽³³⁾。唐才常(1867-1900年)にも通種説がある。彼は「通種」(種族を交わらせること)だけによって中国の再興を図ることができると語り、植物学、動物学、歴史、宗教の分野から例を挙げて論証している⁽³⁴⁾。また、康有為(1858-1927年)、伍廷芳(1842-1922年)を含めた多くの有名人が、こうした論点を表明してそれに賛同している。

「西洋美人」は二重の色彩を帯びている。「西洋」は、強大、文明、裕福、秩序といった言葉の代名詞である。「美人」は女性であるが、中国の女性と違って高貴である。しかし、このような高貴な女性は、「私たち」、つまり男に付随するものであるから、男は彼女たちの高貴さを掌握する。研究者は「女性」と「小説」の社会的地位を次のように指摘している。

女性の伝統社会における地位は、小説と類似している。近代になると、どうでもよい周辺の位置から、社会と文化の中心に移動する機会を得る。小説の革新及びその地位の再評価は、女性の教化及びその地位の向上とともに、当時の一種の文化建設の要求となった。知識人は中国社会の現状を分析する時、社会弊害の根源を小説に求めるとともに、社会変革の希望を小説に託している。これは、彼らが女性の現状を分析するのと同じ発想である。⁽³⁵⁾

知識人の「西洋美人」とは異なって、写情小説家は「本土の美人」を推賞している。エリートで高貴な美人ではなく、「庶民」に目を向けたのである。そこから、彼らはある程度の脱政治化を果たし、趣味的・個人的な文学的風格を有するようになった。1906年の写情小説の勃興は、「女性化」文学の特徴を鮮明に示し、それが民族国家を建築する高邁な理想と奇妙な取り合わせとなっている。

第三節 性別が曖昧な「新女性」小説

清末小説には、女性を十分に描く写情小説のほか、当時もっとも流行した探偵小説があり、こちらでも多くの恋愛が語られている。たとえば『電術奇談』（上海広智書局、1906年）⁽³⁶⁾は写情小説と記されているが、心理学、魔術、推理などの手法を使いこなしている。それゆえに、探偵小説は「通俗」と看做されるのだろう。事実、中国通俗小説の三大陣営である恋愛、武俠、探偵はすべて恋と深くかかわり、才子佳人小説の派生形と言ってもよい。これと比較して、中国の政治小説と科学小説は必ずしも女性と関係せず、あるいは恋愛を必要とせず、女性を無視する（政治小説は、その源流である日本の政治小説とかけ離れている）。

それに対して、清末小説の中には完全に女性を主役とする「新女性」小説もある。「新女性」というのは、彼女たちが従来の、家を出ないで夫と子供に仕える、優しい伝統的女性像を打破したからである。彼女たちは国家の重責を担い、男性の職能に完全に取って代わる新しい肖像になった。文学に通じるか武術に長けるか、いずれにせよ彼女たちは、新しい国家を建設する中で男性を必要とせず、さらに雑念を払い欲望をなくすことを準則とした。「新女性」は男女の性別を曖昧にさせ、「女性」に「男性」と同じような、あるいは「男性」に優越する地位を与える。そのうえ女性たちには、両性の「性」意識がなくなった。この派の作品においては、『女獄花』『女媧石』『女子権』『俠義佳人』が代表作として挙げられる。

一 「情」を語らない新小説

『女媧石』（海天独嘯子著、閩秀救国小説、東亞編輯局、2冊本、1904-05年）は、女性の理想の国をつくる物語である。その「序」は、小説の主旨を明確に示している。

わが国の小説は、汗牛充棟の観がある。もっとも優れたものは、『水滸伝』と『紅樓夢』にほかならない。『紅樓』は男女のことをよく描き、婉曲で繊細である。この本を読む人は、厭世か楽天かのどちらか一つになる。そのため、英雄の気があまりなく、意気消沈し、男女の情が深くなりすぎる。この小説は取るに足りない。『水滸』は、武俠を以て傑作になる。わが国民の意気に大きく関わり、現今の社会でもその風習が残

されている。しかし、女性にとっては、まだ遺憾なところがある。我が国は、山河が秀麗でしなやかであるから、人々の考えも女性を中心とする。それゆえ、社会の改革は男性にとっては難しいことだが、女性にとっては易しい。女性が一変すると、国全体も変わるわけだ。⁽³⁷⁾

「人々の考えも女性を中心とする」というのは、中国人の女性化の傾向を指すのだろう。林語堂（1895-1976年）は、中国人を形容する時、女性化という言葉で概括できると言っている⁽³⁸⁾。だが、なぜ大自然の秀麗な山河に原因を求めるのか。それはともかく、なぜ女性が一変したら、国が変わるのか。著者は続いて言う。

現在、我が国の女学はまだ始まっていない。家庭が腐敗し、男はみんなそれに束縛されている。（中略）家庭教育が興らないと、将来の腐敗した国民は、また女の手によって作りだされる。⁽³⁹⁾

そして、作者は作品中で、中国各地の女性の人材を網羅するようにした。ハンサムな者、武芸に長けた者、利発な者、ユーモアのある者、文学に通じた者、教育者などが、一つの女子国を作り上げる。このような十数人の女性をめぐって話が展開されるが、あまりにも散漫で、取るに足らない問題が多く取り上げられている。これらの女性の心理描写は、まったく男性心理の表現と言ってもいいほどである。作者は『水滸伝』の構造を模倣して、48人の女性の豪傑と72人の女性の博士を作ろうとも意図する。

主人公の錢挹芳^{せんゆうほう}は非常に美しい女性だが、史書を愛読し、政治学問を講じる。彼女は、女権の三項目を論じている。

- 1) 女性は神の寵愛を受ける者であり、天賦の能力がある。
- 2) 今日の世界では、教育、経済、理想のどんな分野でも、すべてにおいて女性が男性に勝っている。
- 3) 男性は一分の才能があつて、一分の勢力を創るしかない。女性は一分の才能があつて、容色と媚態を加えたら、十分な勢力を得られる。⁽⁴⁰⁾

この発言は、纏足をはじめとする女性の身体解放を超えて、より幅広い女性の地位向上について語っているように見える。だが実際にはそれは、容色と媚態を事業の成就における重要な要素とする限りにおいて、女性を災禍とする「女禍論」の亜種以上のものにはなりえないのである。

作中には金瑤瑟^{きんようしつ}、号を花濺女史^{かせん}という人物が登場する。彼女は、ある地域の女性改造会の中心となり、米国に留学、帰国後の危急な国勢に際し、色香を売り物にして太后刺殺を

企む。また、別の登場人物、巧云^{こううん}は中央婦人愛国会の会員である。この会は、絶世の美女に権力者の妾になるよう指令し、それによって権力者の刺殺を果たす。また、肌が黒く、太っている鳳葵^{ほうき}という女性が登場する。酒好きで、常に騒動を起こし、弱者の味方になることを好む。その姿は『水滸伝』に登場する無鉄砲な李逵^{りき}と似ている。

さらに、天香院という奇妙な場所が描かれている。表向きは廓だが、実は花血党の本拠地である。花血党は、政客を暗殺する女性を養成することを目的としている。廓の中には当時最新の科学技術をふんだんに取り入れた事物が多くあり、また女性は先進的な生物学の知識を持っている。彼女たちは、夫婦の愛や男女の情を断ち、性生活を滅却することを原則とする。首領の言う通り、「君の身体は党のものであり、国のものである。自分を支配する権利はない」⁽⁴¹⁾。

もちろん、作者が理想とする社会は現実の陰画にすぎない。すなわち、仮に作者の理想が叶い、「女子国」が建てられ、女権が広まり、女性解放が進んだとしたら、今度は逆に男性がかつての女性と同様の地位に置かれ、抑圧の対象となるだろう。人間は草木ではなく、情を感じない人はおそらく一人もいない。女子国を建設するために、個人の感情を放棄せざるを得ないとしたら、こうした国は人性がなく、暗黒社会そのものだろう。

続いて『女獄花』（王妙如著、別名『紅閨淚』『閨閣豪傑談』、自費印刷、1904年）という作品を見てみよう。「女獄」というのは、二千年の歴史を持つ中国を指す。この作品は女学を講じ、女性界の革命を唱えることを主旨としており、性格の異なる二人の女性、雪梅と許平権が主役として登場する。彼女らは作中の多くの場面で「恋愛はしない」と宣言するが、一方、夫婦や家庭を非常に重視している。これは矛盾するように思える。

作者は恋を描けないのか。それとも、そもそも作者自身が恋に戸惑っているのか。この作品は女性作者によるものだが、主人公たちの「情」に対する熱望は読み取れる。ただし、人の耳目をごまかすため、「教育」や「女権」を高い段階まで向上させ、「情」を抑圧しようとする。だが、どうしても本心に背くことができず、「情」は曖昧ながらも存在し続ける。

武芸に長け、大義凜然とした雪梅は、渾名を「女悪魔」（“女魔頭”）と言う。このような女性は恋愛と無縁なように見えるが、ある日突然、洗練された若者に惹かれ、彼と結婚して仲睦まじく暮らし始める。しかし雪梅はわがままで、外出や外泊を繰り返す、その挙句に夫と喧嘩し、彼を殴り殺してしまう。読者には、彼女が「夫婦」の意味を歪曲しているように感じられる。雪梅が入獄すると、周囲の女性囚人は、ほとんど夫婦関係のために拘禁されている。彼女たちは、婚姻を罵って纏足の罪悪を批判したが、婚姻生活自体については何も努力したことがない。雪梅は革命や流血、暴力を主張し、まるで犠牲を意に介さない無鉄砲な人間だ。

それと相對して、平権は優しくて穏やかで、女性らしい情意がある。宗祥に出会い、プロポーズされた時、彼女は国家に嫁いだと答える。

男女の私情は、誰もが免れ得ない。でも私は、我が国の四億人と結婚すると誓った。私利をはかることはできない。貴兄に愛されて嬉しいが、婚約は今日から始まり、結婚の日は女学の振興の後になる。⁽⁴²⁾

事業を優先させ、結果を得たのち結婚するという平権の理想と行動は、中国の伝統的士大夫の理想と別に変わるものではない。女性の独立が、経済と労働上の自足を前提とすることは間違いない。だが、個人の「独立」が国家レベルで設定されるのは現実的ではないし、それは人性を抹消した偉人の事業でなければならない。

平権は苦心して、女学校を数十年間も経営し続ける。ようやく女権が普及し始めた時、彼女ははいよいよ宗祥と結婚する。名目は「模範として」である。すなわち、ほかの女性たちに、自分が男を愛さない女性と思われると困るからであり、さらに、天地生成の道を破るのではと心配しているからである。この「天地生成の道」というのは、筆者の理解では、子供を産み育て、代々血統を継ぐという女性の職能である。すると、作者が構築した「家庭」「恋愛」は、伝統道徳、倫理規範を延長するための道具であって、女性自身の妊娠や育児への期待や楽しみという立場から生まれた観念ではない。

作者にはそもそも「恋」への理解はあるが、時勢のため「恋」を隠さなければならない。この点に関しては、平権の演説から確証を得ることができる。

いまの女性は、自力で生活することができる。男性を頼りにしなくてもいい。また、読書して礼儀正しいため、男性をねや閨の友とする。そのような恋愛は、何と仲睦まじいことだろう。⁽⁴³⁾

彼女の結婚生活については、「夫婦の愛は、言葉では表現できない。たとえ一般の夫婦でも、昔のように野蛮ではなく、きわめて親密だ」⁽⁴⁴⁾と説明する。作者は、天下の中国人がみな仲睦まじい夫婦になるという理想を語るのだ。全体的に、作中の女性から見た男性像はあまりにも偏っており、「情」が足らず、話が硬くなり過ぎる感を与える。

さらに『女子権』（思綺齋著、国民小説、上海・作新社、1907年）にも、以上と類似した傾向がうかがえる。1940年、自由結婚を追求する一人の中国人女性・貞娘が、女権解放への道筋を念入りに練り上げた。彼女は女学校で勉強して、中西の学問に精通している。利口な彼女は、学校から推薦され、北京高等女子学校に進学することになった。ある日、貞娘は青年鄧述禹とうじゆつうに出会い、スマートで秀美な彼に一目ぼれする。だが、彼女は隠していた鄧の写真を父親に見られてしまう。叱られた貞娘は川に身を投げるが、偶然にも鄧に救われて、二人はさらに情意綿々となる。

貞娘は、新聞社に勤めて女子新聞を創刊、留学後に官僚になる。その目的は、「自由結婚」の実現である。だが、もし本当に結婚を第一に考えているならば、彼女はまず何よりも親

と相談すべきだっただろう。また、二年間、恋人とほとんど連絡し合うこともなく、情感の交流もない状況で、彼女は信仰と想像だけで鄧と結婚する。

小説の前半部分は非常に読者の興味を誘う内容だが、次第に男女の恋愛を離れ、さらに肉親の情も語らず、新聞社、女性権、議会、周遊という、本来は男性社会の活動にばかり主眼が置かれる。刊行当初の1907年時点では、それが人々の心に合ったのだろうか。貞娘と鄧との恋愛は、出会いから救助、結婚まで、全く「甘い愛」の描写がなく、こじつけのような面もある。最後に「自由結婚」という大義名分を掲げるが、皇后が詔を下すことを前提としている。これは両性の恋による自由結婚の物語ではなく、むしろ女性の立身出世物語である。しかも、男性と同様に、文官制度に収斂される「命婦」⁽⁴⁵⁾である。

『俠義佳人』(邵振華著、社会小説、上海・商務印書館、1909年)は非常に長い長篇小説である。「世間万物は、不平であれば鳴る」(「凡物不平則鳴」と「序」)に書いてあるように、作者は中国人女性の虐げられた地位と苦しい生活に同情して、この作品を記したようである。女性の世界は、暗黒である。女性として生まれたことは、どんなに不幸であろうか。女性の知恵が男性に劣るわけではないのに、すべての自由と利益は、男性によって支配されている。いまだかつて女性はその錯誤を言明したことがない。近来、女権を提唱する者がでてきているが、それも僅かではしかない。自由な人は一、二人しかなく、不自由な人は千万にも及ぶ⁽⁴⁶⁾。本を書ける知識人女性として、作者は女性をめぐる様々な不公平を感じたのだろう。この点は、非常に進歩的である。

作者は、女性が凌辱されてきた原因を次の二点にまとめる。

- 1) 男性は女性が凌辱されても人に話さないことを知っているから、やりたい放題だ。
- 2) 女性は本来怠け者であり、何でも人に依存するため、凌辱されても誰にも言えない。

果たして本当にそうだろうか。女性の軟弱さは、生まれつきのものではなく、社会的に構築されたものなのではないか。

要するに、この作品の主題ははっきりしておらず、構造も散漫である。「俠義佳人」とは正義の精神を持つ、美しい三人の女性を指すが、あまり詳しく描写されてはいない。男女の恋があり、親子の肉親の情もあるが、残念ながら描写がすくない。作者の文筆から見ると、もっと生き生きと書けるように思うのだが、政治理念を樹立するためにわざわざその彩を削ったのだろう。

小説の前半は、山東省のある村における姑と嫁の関係、それに農村の風俗を語っている。ある日、女権を講じる三人の女性が村を訪ねてきた。彼女たちは上海の「曙光会」の会員である。この会の宗旨は「仁」であり、中国の女性が暗い世界を生きているため、各地域に会員を派遣して演説を行なわせる。これらの会員は苦勞して、千里の道をはるばる村までやってきて説教する。女性に入会を勧め、共に文明人になろうと言う⁽⁴⁷⁾。あたかも救世

主のようである。なぜ入会すると解放されるのだろうか。村に、また特別な女性・蕭芷芬^{しやうしふん}がやってくる。彼女は、病気の姉を見舞いにきたのである。彼女は実践を主張し、絵空事を嫌い、「曙光会」と争う。話は蕭芷芬の家族、7人の兄弟をめぐって展開する。また、「曙光会」の会長孟迪民^{もうてきみん}を中心に、一連の人間関係が描き出される。

以上述べてきた「女子世界」の小説では、男性は従属、被支配の立場にあり、女性は指導者の地位を占める。これらの生き生きとした女性のうちには、美しく賢い女性もあれば、胆力と識見を抜群に備えた女性も、感情豊かな女性も、さっぱりした女性もある。ただし、彼女たちはあくまでも男性中心社会の陰画であり、「男」という身分に改変すれば、そのまま通ってしまう。すなわち彼女たちの姿は、中国伝統小説中の男性像と非常に類似しているのである。すると、これらの女性は本当に「女」なのかという疑念が湧いてくる。

先にも触れた通り、彼女たちが理想や抱負を論じ、恋愛や家庭を無視し、血統の伝承を重視するにもかかわらず育児や娯楽だけは語らないのは、男性の立場とその言動をそのまま敷衍しただけだからである。女性は容貌については男性に接近し相似し、行動については男性の理想と志向を継承する。このような「新女性」は、女性というより、むしろ男性と似た形木^{かたぎ}（模様を彫刻した板）と言ってもいいだろう。彼女たちは愛を国家に捧げ、「性」を切り捨てる無性の人間である。

二 「男装」の女性は、好かれるか

ところで、清末の「新女性」小説とぜひ区別したいものに、古代に書かれた女性による男装の物語がある。有名な作品としては、父の代わりに戦場に行く花木蘭の話⁽⁴⁸⁾や楊門⁽⁴⁹⁾の十二人の女将の話、祝英台⁽⁵⁰⁾の修学の話などがある。これらに登場する女性は勇猛であろうと、強靱であろうと、文雅であろうと、最後には「娘の体」を復元し、家庭に復帰し、男性につき従うことを目的とする。

一方、清末の「新女性」小説は、完全に男性を排除し、あるいは男性と対立する集団を作ることによって、女性を国家の主体とし、男性を家庭の主体とすることを目指している。しかも、『女獄花』の王妙如や、『俠義佳人』の邵振華のような女性作者による作品もここには含まれている。彼女たちは「女中華」の天下を作り、女性の発言力を高めようとする際、明らかに「男性」の理念を借りて、「男性」と同じような立場をとる。

これらの問題について、舒蕪⁽⁵¹⁾は次のように指摘している。すなわち、彼の知る女性の男装は、すべて男性の手によって作られたものであり、男性の「易性想象」(性を易^かえて象^{かたち}を想うこと)を表現している。女性が男装したときの心理については、作品中にあまり描かれていないが、女性が本来の性別に復帰した際の感情やその受容の仕方は注目に値する。男性作者が描くこれらの「易性想象」によれば、女性は将来の雄飛に向けて雌伏せざるをえないが、いかなる男装経験があっても、女性に復帰すれば無条件で男性に屈服する⁽⁵²⁾。一方、女性作者が書いた、女性が男装する小説⁽⁵³⁾については、舒氏は読んだことがなく関

心がないらしい。基本的には、「香草美人」の伝統は「臣妾意識」の表現と認識されている。

新文学時代に女性問題に関心を持った周作人（1885-1967年）は、1927年に次のように批評した。

私は、古代のキリスト教徒が女性を悪魔と看做したことを好ましくは思わない。しかし、女性崇拜の人間が、女性を聖母と看做すことはさらに嫌悪する。それは、ゴロツキが悪ふざけをする対象が、貞女でなければならないのと同じように憎たらしい。
(中略)

現在、すべてが男性の論点を基準としているのはもっとも大きな間違いである。たとえ婦女運動でもこの枠を出ない。ゆえに、女性は「男性化」を解放の徴とし、また、セックスにおいても男性の観点に依拠する。つまり女性の受け身を称讃している。女性心理上の本当の事実女性は女性の顔をつぶすと思ひ、女性自身でも認めない。⁽⁵⁴⁾

周作人の言葉から窺える、「男性化」による「女性解放」は、1930年代まで続いた。

それに対して、舒蕪は周作人の述べる「男性の論点」「男性の標準」に二つの意味——「男性のように」と「男性に好まれるように」——があると指摘する。実は、女性が言行において男性を模倣することは、男性の望みではない。また、女性がセックス上受け身の状態になるのは男性の希望だが、「男性のように」と相反している。要するに、「男性の論点」は、男性の自己中心的で利己的な観点にすぎない⁽⁵⁵⁾。

ところが、男性中心の論点は、清末の「新女性」小説によって壊される。その影響力のほどは明確ではないが、当時において「女中華」の構築は封建勢力を打破し、「吶喊」し（関の声を挙げ）た点に歴史的意義があった。これは、梁啓超をはじめとする知識人のあらゆる救国の手段——仏教救国論、熱血救国の虚無主義等々——と本質的には同じである。

こうした「新女性」、男装した「女性」は、男性文人の好みではない。1910年代から流行する鴛鴦蝴蝶派の小説の場合、女性は明らかに惨めで、哀しい恨みをぶちまけ、女性美が漂う者として描かれる⁽⁵⁶⁾。これは普通的女性である。「新」女性は、特定の時期に、特定の必要に応じて作られた産物である。

男性文人は本来「新女性」を好まない以上、女性が「新女性」こそあるべき肖像だと思ひ込み、そのようになろうと努力したとすれば、それはとんだ錯誤であろう。文人が苦しい恋愛小説を作るのは、社会批判をするためではない。問題提出とその解決を試みるためでもない。ただ自身の感情を述べ、あるいは「文字」ゲームにおいて、作家としての自らの満足を實現させるためなのである。

おわりに

梁啓超は早くも1902年に小説界革命を提唱し、『新小説』の創刊にあたって、「本社がもっともほしいものは、写情小説だ」とはっきり述べている。しかし、「ただ、男女の情に愛国の意を寓するものでなければならない」⁶⁷⁾と、時局に益するべきだという条件をつけてもいる。

梁啓超が写情小説を重んじたのは、無味乾燥な理論や説教、面白くない政治小説に人を惹きつける魅力がないと知っていたからである。ただし実際には、『新小説』は、経費の問題で停刊せざるを得なかった。清末写情小説の中心人物であった吳趸人は、『新小説』に「電術奇談」や「二十年目睹之怪現狀」「痛史」「新笑林広記」など、多くの作品を発表した。しかも彼は、多くの恋愛小説を作ったばかりでなく、「情」を主旨として小説雑誌『月月小説』を創刊した。先にも述べたように、彼は梁啓超と直接に付き合ったことがあり、その影響を受けたのかもしれないが、同時に一介の文人として社会への責任感に駆りたてられて、救国保存、道徳恢復の呼びかけに応じたのであろう。

清末、国家が破れ、民が危難に遭い、東西文化が衝突した転換期に、どのように士気を鼓舞し、国家を助けるのかが、知識人や革命家、文人の課題だった。実行の程度と行動はそれぞれ異なるが、近代文人は自分の有する文化資本、社会資本を以て身分を構築し、地位を求め、多くの読者の支持を得ることができた。

彼らは、中国の女性が非常に優れており、西洋女性を輸入しなくても救国できると考えていた。だが、なぜ「女性」は必ず「国家」と結びつけられたのだろうか。知識人の「国民の母」論や、「新女性」小説の無性の女性、写情小説の忠孝節義を遵守する女性、そのすべてが国家を目標としている。中国人は「修齊治平」を重んじる。「齐家」が大きく重視されたのは、中国人の「家國」という一体意識があるためだ。「女性」は、常に想像される家國の中に存在している。ゆえに、女性を称讃する聖女論でも、非難する災禍論でも、家國の利益に即して論じられる。吳趸人が、女性の地位を向上させ、両性の情感を「忠」の源としたのは、「新女性」の作り直しによって家國を再建する力を凝集し、新しい価値観を樹立しようとしたからである。「新女性」小説の女性も文武両全であり、完全に家の主、国家の棟梁となった女性である。

しかし、このような男女の恋愛情感を切り捨てた無性の、強い女という女性像は、果たして男性の好みになりうるだろうか。彼女たちは、度量が大きく、堅忍の美德と個人の愛情を追求する意識とを持った、写情小説における「強い」女とは異なっている。むしろそちらこそが、男性にとって理想的な「新女性」となりうるのである。

1907年、『中外小説林』に「伯」という署名の論文、「義俠小説と恋愛小説は、社会的情感を注ぎ込む速力を持つ」が載せられている。

艷情小説が述べるのは、美人香草や恋心だけではない。また、国民を浮世に誘導するためでも、作者が生計を立てるためでもない。作者は、文筆によって世界を主宰す

る情を表現しようとする。天下には無名な英雄がいるが、無情の英雄はない。古今の偉業は、すべてが情という文字で成し遂げられたものである。(中略) 情をよく利用すれば、大きな国でも多くの民族でも情を通して結合することができる。今日の小説界はとても発達している。その中で多くの小説は男女の恋情を借りて、英雄の懐を述べるが、この点において、中国や東洋、西洋の訳書はみな同じである。⁽⁸⁸⁾

この言葉は、清末写情小説家の心理の要約として相応しいだろう。

古代文学に描かれた女性は、主に家庭を固く守り、奥まった邸宅の中で活動している。たとえ家庭を出た女性でも、多くは妓楼のような花柳界に落ちぶれている。一方、写情小説家が描く女性たちは、積極的に社会に向かったわけではないが、閨房を踏み出し、社会に入り世を渡り、自己の価値を実現しようとした。しかし、結局家庭に復帰することになる。これはすなわち、写情小説の女性たちが封建社会の規範から次第に脱却するようになっても、独立した「社会の人」とはなれなかったことを意味する。彼女たちはある程度の独立性を獲得し、恋愛、婚姻の自主性を求めるようになったが、「家」を離れることはなかった。つまり、どうしても「夫」に対する忠誠心を維持しなければならなかった。彼女たちのすべての努力は、この「家」と「夫」のためにあった。これこそが清末文人の限界性である。彼らはそうした価値観のもと、自らの理想的な女性像を創作するが、そこには彼ら自身の姿が映し出されているのである。だが、それにもかかわらず清末写情小説は、「近代」文人の出発点として十分に評価されるべきであろう。

[注]

- (1) 清末民初に流行した、趣味主義を宣揚する流派。小説を主として、花柳、恋愛、探偵、任侠など、様々な種類がある。従来、中国現代文学史においては、低俗なものと看做されてきたが、近年、その文学的価値と社会的効能を客観的に評価するようになった。清末写情小説が清末小説の末流と評価されたのは、恋愛を描き、鴛鴦蝴蝶派と関係があったことに由来する。
- (2) 写情小説の代表的なものとしては、吳趸人『劫余灰』『情變』『電術奇談』、李涵秋『瑤瑟夫人』『双花記』、何詠『碎琴樓』、蘇曼殊『斷鴻零雁記』、徐枕亞『玉梨魂』、符霖『禽海石』、非民『恨海花』などが挙げられる。
- (3) 譴責小説とは、社会の暗闇を諷刺し批判する清末小説の一種である。1903年、四大譴責小説が一斉に生まれた。四大譴責小説とは、吳趸人『二十年来目睹之怪現狀』、曾朴『孽海花』、劉鶚『老殘遊記』、李伯元『官場現形記』という四作品を指す。魯迅『中国小説史略』上海古籍出版社、2006年、258頁：詞氣浮露、筆無藏鋒、甚且過甚其辭、以合時人嗜好。
- (4) 『大學』：心正而身脩。身脩而家齊。家齊而國治。國治而后天下平。『十三經注疏』中華書局、2008

年、1673 頁：心正而後身脩。身脩而後家齊。家齊而後國治。國治而後天下平。

- (5) 李鴻章の語：臣竊惟歐洲諸国，百十年來，由印度而南洋，由南洋而中国，闖入边界腹地，凡前史所未載，亘古所未通，無不款關而求互市。我皇上如天之度，概与立約通商，以牢籠之，合地球東西南湖九万里之遙，胥聚于中国，此三千余年一大變局也。梁啓超「同治十一年五月復議製造輪船未可裁撤折」，同『李鴻章伝』哈爾濱出版社，2009 年，67 頁。
- (6) 夏曉虹の論考によると，呉は 1903 年冬に日本に行き，出版に関して『新小説』社に連絡したことがあり，そこで梁啓超に会ったという。また，呉は上海で梁を接待したことがあると言っている。夏曉虹「呉趸人与梁啓超關係鈎沉」『安徽師範大学学报』（人文社会科学版）第 30 卷第 6 期，2002 年 11 月，636-640 頁。
- (7) 同上，夏曉虹「呉趸人与梁啓超關係鈎沉」639 頁。
- (8) 『禽海石』「弁言」141 頁『中国近代珍稀本小説』8，春風文芸出版社，1997 年）：曩聞譚瀏陽言：造物所以造成此世界者，只是一“仁”字。余窃以為不然。蓋仁字之範圍甚褊，未足以組織乾坤，綱維宇宙也。
- (9) 同上，141 頁：茲編為言情小説，可与天下有情人共讀之。讀之而能勃然動其愛同種、愛祖国之思想者，其即能本区区儿女之情而拓而充之者也。
- (10) 『禽海石』第一回，145-146 頁：看官，可曉得我和我意中人是被那个害的？咳！說起来也可憐，却不想是被周朝的孟夫子害的。看官，孟夫子在生的時，到了現在已是兩千幾百年了，他如何能來害我？却不想孟夫子當時曾說了幾句無情無理的話，伝流至今，他說：世界上男婚女嫁，都要憑着父母之命，媒妁之言。否則，父母国人皆賤之！
- (11) 『禽海石』第一回，147 頁：我那最心愛最知己的意中人，他却是被我害的。
- (12) 1848 年の『風月夢』^{かんじようもうじん}（邗上蒙人作，初刊は上海・申報館，1883 年）は最初の狭邪小説とされている。それから 20 世紀初頭にかけて，40 余部の狭邪小説が作られていたという。その中で『海上花列伝』（花也憐儂〔韓子雲〕作，初出は『海上奇書』1-15 期，1892 年）はなかなかよい評判だが，後期，ますます卑俗になったと言われている。
- (13) 例えば、『周易・繫辭上』：天尊地卑，乾坤定矣，卑高以陳，貴賤位矣。（中略）乾道成男，坤道成女（『周易正義』卷七，『十三經注疏』中華書局，2008 年，87-88 頁）。班昭『女誡・專心』：夫有再娶之義，婦無二適之文，故曰夫者天也；天固不可逃，夫固不可違也（『後漢書集解』上海古籍出版社影印民国王氏虛受堂刻本，2006 年，389 頁）。『列子・天瑞』：男女之別，男尊女卑。（『列子』卷一，『列子』上海書店，1996 年影印『諸子集成』6 頁）。『礼記・郊特牲』：男帥女，女從男，夫婦之義由此始也。（『礼記正義』卷二十六，『十三經注疏』1456 頁）。
- (14) 中国殷王朝末期（紀元前 11 世紀ごろ）の紂王の妃。紂王に寵愛され，悪女の代名詞的存在として扱われる。
- (15) 春秋末期の女性。越王勾踐^{こうせん}が，呉王夫差^{ふさ}に，復讐のための策謀として美女の西施を献上した。策略は見事に当たり，夫差は彼女に夢中になり，呉国は弱体化し，ついに越に滅ぼされることになる。

- (16) 秦末から楚漢戦争期の女性、項羽の愛人。劉邦が率いる漢軍に敗れた項羽は自殺し、虞美人もまた項羽の足手まといにならぬよう自害した。
- (17) 唐代玄宗皇帝の寵姫。玄宗皇帝が寵愛しすぎたために安史の乱を引き起こしたと伝えられたことから、傾国の美女と呼ばれる。古代中国四大美人（楊貴妃・西施・王昭君・貂蟬^{ちようぜん}）の一人とされる。なお、貂蟬は『三国志演義』の登場人物。
- (18) 程郁『清至民国蓄妾習俗之變遷』上海古籍出版社、2006年、350頁。
- (19) 嚴復訳『天演論』中国青年出版社、2009年、2-3頁：物競者、物争自存也、以一物以与物物争、或存或亡、而其効則歸于天沢。天沢者、物争焉而独存、則其存也、必有其所以存、必其所得于天之分、自致一己之能、与其所遭值之時与地、及凡周身以外之物力、有其相謀相剂者焉。原著は、ハックスリー Thomas Henry Huxley (1825-95年) の『進化と倫理』*Evolution and Ethics* (1893年)。
- (20) 蔡元培「佛教護国論」『蔡元培政治論著』河北人民出版社、1985年、16頁。梁啓超「論佛教与群治之關係」『新民叢報』第23号、1902年12月。
- (21) 章太炎「革命之道德」『民報』第24号、1908年10月。
- (22) 楊度「金鉄主義説」『楊度集』湖南人民出版社、1986年。
- (23) 「群治」は社会という意味。
- (24) 梁啓超「論小説与群治之關係」1頁：今日欲改良群治、必自小説界革命始；欲新民、必自新小説始。
- (25) 劉麗威「淺議中国近代關於賢妻良母主義的論争」『婦女研究論叢』2001年第3期、39頁。
- (26) 同上、40頁。
- (27) 同上、40頁。
- (28) 金一『女子世界』発刊詞：欲新中国、必新女子；欲強中国、必強女子；欲文明中国、必先文明我女子、必先普救我女子、無可疑也。丁初我等編『女子世界』1号、大同印書局、1904年。転引用、周樂詩「新小説中新女性形象的意義」、『婦女研究論叢』2009年第6期、2009年11月、56-63頁。
- (29) 同上：謂二十世紀中国之世界、女子之世界、亦何不可？（中略）中国的滅亡、挽救于女子、亦未可知。
- (30) 梁啓超『飲冰室合集』「飲冰室文集之二」中華書局、1989年、19頁「倡設女学堂啓」：上可相夫、下可教子、近可宜家、遠可善種、婦道既倡、千室良善、豈不然哉。
- (31) 胡適『胡適文存』亜東図書館、1924年、卷四「美国的婦人」40頁：女子也是堂堂的一个人、有許多該尽的責任、有許多可做的事業、何必定須做人家的賢妻良母、才算尽我的天職、才算做我的事業呢？
- (32) 前掲『飲冰室合集』「飲冰室文集之七」中華書局、1989年、4頁「論中国學術思想變遷之大勢」：二十世紀則兩大文明結婚之時代也、吾欲我同胞張灯置酒、迓輪俟門、三揖三讓、以行親迎之大典、彼西方美人必能為我家育寧馨兒、以亢我宗也。

- (33) 易羸「中国宜以弱為強説」『湘報類纂』甲集上，3-6 頁。丁偉志・陳崧『中西体用之間——晚清中西文化觀述論』中国社会科学出版社，1995 年，257 頁より再引用：何謂改法？ 西法与中法相參也。何謂通教？ 西教与中教并行也。何謂屈尊？ 民權与君權兩重也。何謂合種？ 黄人与白人互婚也。
- (34) 唐才常『唐才常集』中華書局，1980 年，100-104 頁。
- (35) 周樂詩「新小説時期趣味文学傳統的形成」，上海社会科学院『社会科学』2010 年，第 2 期，170-176 頁。
- (36) 「電術奇談」24 回，菊池幽芳原著，方慶周訳述，我佛山人（吳趸人）衍義，知新主人（周桂笙）評点，『新小説』第 8-18 号，1903 年 10 月-1905 年 7 月。原作は菊池幽芳「新聞賣子」『大阪毎日新聞』1897 年 1-3 月連載，のち単行本 2 冊，大阪駸々堂，1900 年。樽本照夫『清末民初小説目録』第 4 版，清末小説研究会，2011 年による。
- (37) 『女媧石』「序」7 頁（『中国近代珍稀本小説』3，春風文芸出版社，1997 年）：我国小説汗牛充棟，而其尤者，莫如『水滸伝』、『紅樓夢』二書。『紅樓』善道兒女事，而婉婉非則，柔人肝腸。読其書者，非入于厭世，即入于樂天，幾將曰英雄氣短，兒女情長矣。是書也，予不取之。『水滸』以武俠勝，于我国民氣大有關係，今社会中尚有余賜焉。然于婦女界，尚有余憾。我国山河秀麗，富于柔美之觀，人民思想多以婦女為中心。故社会改革以男子難，而以婦女易。婦女一變，而全国皆變矣。
- (38) 林語堂『中国人』学林出版社，2001 年，90 頁。林は，中国人男性（文人）を，抽象的思考に欠けるが形象的思考に富むと批評し，西洋の文学・言語学と相對する立場からその言説を唱えた。
- (39) 『女媧石』「序」8 頁：今我国女学未興，家庭腐敗，凡百男子皆為之鉗制，為之束縛。（中略）家庭教育不興，未來之腐敗国民，又制造于婦女之手。
- (40) 『女媧石』第一回，14 頁：女子是上帝的驕子，有一種天賦的能力，不容他英雄豪傑，不入我的彀中。（中略）今日世界，教育經濟，以及理想性質，都是女子強過男子。（中略）男子有一分才幹，止造得一分勢力。女子有了一分才幹，更加以姿色柔術，種種補助物件，便可得十分勢力。
- (41) 同上，第七回，51 頁：你須知道你的身体，先前是你自己的，到了今日，便是党中的，国家的，自己没有權柄了。
- (42) 『女獄花』（『中国近代小説大系』64，百花洲文芸出版社，1993 年）第十一回，752 頁：男女私情，人所不免。但妹妹此身，已立誓許与我国四万万人，何敢私自自利。今又承哥哥眷愛，請与哥哥約，結婚之期，請自今始，完姻之日，且待女学振興之後。
- (43) 同上，第十一回，755 頁：今女子既能自謀衣食，不必累及男人，又能知書達礼，為男人閨房中之益友，則男女的愛情，如枯木逢春，勾萌漸達。那時相見如賓，說不尽万種恩愛呢。
- (44) 同上，第十二回，759 頁：夫婦的恩愛，自可不言而喻，即普通夫婦，亦不像前時的野蛮。那夫婦的愛情，如膠似漆，真是說也說不能尽。
- (45) 朝廷から任命された官吏。
- (46) 『俠義佳人』「自序」85 頁（『中国近代小説大系』64，百花洲文芸出版社，1993 年）：女界黑暗，

吾生不幸而為女子，受種種之压制，考吾女子之聰明智惠，非遜于男子，而一切自由利益，則皆懸諸男子之手，天下之事，不平孰甚？然吾女子未嘗言其非也。近今有倡女權者矣，有倡自由者矣，而鳳毛麟角，自由者一二，不自由者千萬。

- (47) 『俠義佳人』第四回，135 頁。
- (48) ムーラン。古楽府「木蘭詩」（作者不詳。南北朝時期の北朝の作という。『樂府詩集』第 25 卷，『古詩原』第 13 卷）の登場人物で，父親の代わりに男に扮し，從軍し活躍した若い女性。
- (49) 宋の楊業の一家四代が，強い忠誠心で辺境を防衛し，国に身を捧げる事績を描く『楊家将』などがある。
- (50) 中国四大民間伝説の一つ，『梁山泊与祝英台』の登場人物である。男装して，梁と三年間勉強している間に恋に落ちる。
- (51) 舒蕪（1922-2009）は現代作家，文学評論家。
- (52) 舒蕪『平凡女性的尊嚴』上海書店出版社，2007 年，95 頁「性別認同与尊異」。
- (53) 彈詞『再生縁』など。彈詞は，七言韻文で書かれた小説。明末清初の陶貞懷『天雨花』が最初の作品とされ，19 世紀までに 400 種以上の作品が作られていた。陳端生『再生縁』，邱心如『筆生花』，李桂玉『榴花夢』などの代表作がある。
- (54) 周作人『談虎集』河北教育出版社，2002 年，275-276 頁「北溝沿通信」。
- (55) 詳細は，舒蕪『哀婦人』安徽教育出版社，2005 年，77 頁。
- (56) 劉納「1912-1919 傷心慘目的小説世界」『三峡学刊』1994 年第 2，3 合期，26-27 頁：一反辛亥革命時期政治小説剛健質朴的叙述筆調，這一時期的作者大多操作着女性般凄婉的文筆。与此同时，那種敢做敢為，不讓須眉的“新”女性已經不為時代風氣所重，文人們重新欣賞起凄凄苦苦、哀婉幽艷的女性美。（中略）女性的哀怨比她們的美麗更使這一時期的小説作者着迷。在風行一時的以“情”為名目的小説中，也只有因“可憐”而“可愛”的女性具備作倍受青睞的“芳情”、“哀情”、“慘情”小説女主人公的資格。中国文人諳熟“以哀進嫉俗之志，托之番草美人”的隱喻手法，這一時期的小説作者依然按照古代文人所指示的既定思路，將自己不逢時、不得志的哀怨，寄托于“可憐”的女性形象。（中略）“婚姻不自由”的題旨一般只表現在小説情節的浮面，更重要的是作者們以哀慘的故事与人物完成了使自己“傷心”的感情世界境界化、形象化的過程。
- (57) 「新小説社征文啓」『新民叢報』第 19 号，1902 年 10 月 31 日：“本社所最欲得者為写情小説”“惟必須写兒女之情而寓愛國之意。”
- (58) 黄伯耀「義俠小説与言情小説具灌輸社会感情之速力」『中外小説林』第一年七期，1907 年。陳平原・夏曉虹編『二十世紀中国小説理論資料』（第一卷）北京大学出版社，1997 年，228-230 頁。